スパイよ眠れ、豚のはらわたとともに

電之隕石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スパイよ眠れ、豚のはらわたとともに

【Ｎコード】

Ｎ７５５２Ｘ

【作者名】

電之隕石

【あらすじ】

２チャンネル創作文芸「この三語で書け！　即興文ものスレ」より「豚」「メガネ」「フィリピン人」からなる短編。

「君にうってつけの仕事がある」
ゼネラル・マーチンは真顔で俺を見つめた。灰色の瞳が俺を射貫く。
嫌な予感がした。
うってつけってのが引っかかりすぎだ。どうせまたろくでもないミッションに決まってる……

――で、マーチンに言われてから三ヶ月たった。俺は過酷な指令にもようやくなれてきた。
えっ？　慣れたんだろうか。冗談だろ。
それにしても、こんなひどい仕事を請け負うのは「異能スパイ」の中でも俺くらいではないのか。
俺は三ヶ月もの間、一匹の大豚の腹の中に潜んで時機を待ち続けていた――。
俺は豚と神経を直結させ、豚の五感を通して外部の様子がわかるようにしていた。
困ったのは選ばれた豚が俺の神経パルスと波長が合わない。
なかなか言うことを聞いてくれないのだ。
右へ行けと念じても、左へ曲がれと念じても、豚はどこ吹く風で自分の餌を探し回っている。ところ構わずクソを垂れた。
それでも辛抱強く俺は待ち続けた、抹殺すべきターゲットがやってくるのを。

テロリストのガガーリンは変態である。動物とセックスするのが好きなのだ。
人間の女では立たない。
そのガガーリンが、有名ペットショップで、俺が入っている豚に目をつけた。

目をらんらんと輝かせて、俺を……じゃなくて豚を見た。
ガガーリンは偽造カードで豚を購入し、大層な邸宅に連れ込んだ。
「さあ今日から君の名はアマンダだ。アマンダ、入れるよ」
ガガーリンは寝室で全裸になり、アマンダと名付けた豚の肛門に自分の陰茎を差し込もうとした。
俺。我慢だ。我慢しろ。でも、最悪。
「ご主人様、お待ち下さい！」
悪夢の行為を断ち切ろうとしたのは涼やかな日本語訛りの一声だった。
誰だこいつ？
ミニのメイド服を着たオカッパの女が入ってきた。
今、ガガーリンの陰茎が豚の肛門に差し込まれている。そのせいでガガーリンの脳の情報が俺に流れてくる。
皮膚の細胞からも微弱な情報を傍受できる俺の得意技だ。
この女はガガーリンに一生つきまとうと公言しているメイドリーダーの天野元子だ。ガガーリンが人間の女に興味を持たないせいで未だに処女である。
美人であるはずの天野元子の顔は、馬鹿でかいゴーグルで覆われていて全貌が見えない。
知ってる。あれは「全能メガネ」と呼ばれている軍用ゴーグルだ。
暗い、ゴーグルの奥の目が、まっすぐに豚の腹の中を見た。
やばい！
「ご主人様、その豚には人間が潜入しております。かなり融合されていますが、自意識を持ち、ガガーリン様に殺意を抱いております。すぐにお離れ下さい」
と彼女が警告しても、豚と交合中のガガーリンがすぐに離れるわけもないので、元子が主人を羽交い締めにして、意外な馬鹿力で俺の豚と彼を引きはがした。
あれ？　元子さん、あんた、この豚に嫉妬してるのか。
「フォーティ・エイト！　そのうす汚い豚を捕獲しろ」

四十八人いる名もなきメイド部隊が、うすのろの豚を縄で縛り、ありったけの麻酔弾を撃ち込んで鎮静させた。
当然、麻酔は俺にも絶大な効果を与えた。
諸君、サラバだ。オヤスミナサイ……

一週間後くらいたったか。俺を孕んでいる豚公は、既に絶命して、テログループ傘下の肉屋にぶらさげられていた。
「私、動物切り刻むの大好きあるよ。こんな大きな獲物久しぶり。楽しいね」
その道三十年の解体屋を営んでいるといった顔つきのフィリピン人が、フックにぶら下げられた豚の体に大きな長剣を差し入れた。
豚の腹がパックリと開かれ、赤い中身が一気にずり落ちる。
豚の内臓と一緒に、俺は久しぶりに外の空気を吸った。
吸ったはずだった。
吸えない。呼吸が止まっている。
フィリピン人は驚愕していた。
「アジャパー、この豚の内臓、へんあるねー。手と足と頭あるよ。目玉みたいなのもある。でも人間じゃない。やっぱり内臓だね。化け物かな」
俺は人間だ。そう叫ぼうとしても声が出ない。声帯は既に溶けてなくなっていた。
どうやら俺は豚の体内に長くいすぎたようだ。加えて麻酔銃で意識が吹っ飛んでしまい、豚の内臓の中で自分を維持できなかったのがかなりマズい。
俺の元の体は豚の内臓と混ざり合い、見かけ上、世にも不気味な内臓人間になってしまっていた。
骨が溶けてなくなっていたので、俺はその場にどっ倒れて、ずぶずぶと豚の内臓の中に沈んでしまった。

おわり。

（おい、待てよ。俺は救出されんのか？！　終わるな。こらっ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7552x/

スパイよ眠れ、豚のはらわたとともに

2011年10月20日06時06分発行